

私の生き方

彩木の会 木原 重治 氏

・プロフィール:

昭和18年3月1日、旧満州(現中国東北部)奉天に、生まれる。69歳。昭和36年3月、佐伯鶴城高校を卒業。自衛隊に入隊。後、本田技研等、民間会社に勤め、26歳で結婚。29歳の時、保険会社に入社。以後一筋にこの道を歩み、60歳で、北九州支社長を最後に退職。



その後、代理店経営を続けるかたわら、区長等、地域活動に貢献。現在、婚活応援「G o Mの会」会長4年目。奥さんと二人、指夫にお住まい。子どもは男女2人、孫4人。

・いわゆる引揚者でした

父は満鉄の鉦山技師で、満州の人を相手に配給所もやっていたようです。公平に配給をしていたというようなことで、私たち、母と子ども3人はそのことで助けられることになりました。

私は2歳半でしたから、自分の直接の記憶はあまりないんですが、聞いた話です。

関係していた満州の人たち10人くらいが来て、棒を持って駅まで護衛をしてくれたそうです。父親は現地召集で、その後シベリア行きでいませんでした。

母親と長男と私、もう1人弟が居たんですがこれは逃げる途中で栄養失調で死にました。

私たちが乗った列車の後に出発した列車は、トンネルに爆弾が落ちて不通になり、私たちが最後になったそうです。貨物の無蓋車の上に防空頭巾をかぶって、トンネルを通過する時は伏せていました。命からがら、その後まだ1年くらい逃げ回ったのです。

終戦が昭和20年8月で、私たちが内地、日本にたどりついたのが21年7月ですから、その間相当、母親は苦勞したようです。

父親のやったことが私たちを助けてくれることになり、母親が連れて帰ってくれた。父親と母親のお陰で、命がある。そう思っています。

・自分探し

帰ってきました、引揚者ということで大変な貧乏生活をしました。

高校に入学した時は、一応進学するつもりだったんですけれども、親父が事故に遭いまして、親父のせいにするわけではないんですが、私は大学を諦めました。

就職するにしても、その当時背広と布団も一式作らなければならない。そんな金はなかったんです。どうしようかなと途方に暮れていた時、目に入ったのが自衛隊の募集の広告でした。よく聞いたら、制服はくれるし、自分で買うのはパンツだけでいいということでした。

鶴城の制服のまんま行きました。行きましたらそこで全部交換です。今まで着ていたのを脱いで、制服に着替えて、二等兵からのスタートでした。

「おおなみ」という呉所属の護衛艦、1700トン、乗組員は170名ほど、に乗り組みました。海上自衛艦ですけど、自衛隊の世界は、階級の世界ですね。こりゃーしかし、こんな所でぼやぼやしていたらどうなるだろう。

このまま乗っていてもしょうがないな、と考え始め、思いついたのが、防衛庁の守衛にでもなって、夜間大学に行こうということでした。居ても立っても居られなくなりました。

・総監の自宅を訪問

呉地方隊の総監、昔で言うと海軍中将です、その人の所を日曜日に訪問したんです。

「総監ご在宅ですか」と、するとすっと入れてくれました。海軍中将から「まあ上がりたまえ」ということで、紅茶をいただきました。

「東京に行きたいんですが」、すると「ウン、分かった」と言ってもらえたんです。その時は喜んで帰ったところが、艦長に呼ばれました。

「お前、何ちゅうことをしてくれたんか」ということで怒られました。上から順番に、普通は下からですが、こっぴどく怒られました。

それで参ってしまい、「もう辞めます」と申し出ました。いきなり逃げちゃうと官品横領罪になる。着てる物が全部借り物ですから。手続きを経ないと罪をかぶることになります。

「木原一士が退艦する。手空き総員上甲板、見送りの位置につけ」と号令がかかるんです。全員が見送ってくれました。それで私、甲板に上がってみるとザーッと整列してくれている。たかだか私のような一兵卒のためにです。最後に船の玄関、玄関からタラップを降りて、その途中、艦旗に向かって敬礼、降りるとランチが待っています。ランチの艇長に敬礼して乗るわけです。当時のことは今でもよく覚えています。

・波乱万丈

18歳から29歳までは、波乱万丈と言えるほどいろいろな仕事を経験しました。

本田技研に3年ほど行きました。昭和39年、待遇はすごく良かったです。

今考えるとすごくいい福利厚生でした。作業が終わると、ロッカーに行く前にサウナと風呂があるんです。作業服を脱いだらそれが全部クリーニングに回るんですね。そして帰りはさっぱりした感じで帰るんです。

さっぱりした感じで帰るのが悪かったんですね。会社と寮の間に飲み屋が3軒ありました。必ず一軒ずつ寄って帰る。給料日は大変でした。ツケを払ったら、また残りは何にもなくなって。私は一つの会社を辞めると必ず家に帰ってました。佐伯に帰るんです。スタートがまた佐伯からなんです。何回か帰っていると友達に会いましてね、言われるんです。

「お前、また辞めて帰ったんか」と。いろんな経験をしながら、26歳の時、結婚。その後も二度職を変えました。

・最後に手にした職

結婚後3つ目の就職先が保険会社でした。営業職員6万名の一番ビリからのスタートです。

一般のセールスとして入りました。2年ほどして、所長になりましたが、それは運が良かったのかもしれませんが、バブルの始まりで、行けどんどんで組織が大きくなっていました。

会社はすごく頭が柔らかいんですね。入社2年しか経ってない私を所長にしてくれたんです。保険会社は支部長と言いますが、部下が14人、その時、私は30歳。職員さんの平均年齢が、50歳。母親、父親みたいな人ばかりでした。

支部長職を16年ほどしましたが、結構私の支部は成績がよかったです。それから営業部長に登用されました。

・私の生き方

保険会社の組織は、支部の上に営業部、その上に支社があります。営業部は、支部を5つか6つ束ねていて、営業部には、職員がだいたい160人くらい。

たかだか高卒で、何も知らずに入って2年足らずで支部長にってもらって、それを16年やったとはいえ、営業部長にまでなれたわけです。

上司と経営方針で衝突しいしいの16年間で、それでも実績が上がったから部長に上げざるを得なかったのでしょうか。営業部長になってからも、上と衝突ばかりで、定年までよくもったなと不思議なくらいです。

「瞬間湯沸かし器」というのがどこに行ってもついて回った私のあだ名だったようです。

鹿児島県の営業部長の時に、自分のやり方に確信を持ちました。

保険会社の仕事では、数字ばかりを追って行くのが普通なんです。私はそれを逆に行ったんですね。

数字ばかりを上げるのではなくて、先ず環境整備をする自分なりの仕方です。結果的に全国250の組織の中で、成績がトップになり、それが3年連続で続いたんです。

私の仕事の仕方というのが、成果として確認できたということで、自分で満足しております。

・意思(医師)を貫く

定年した年の8月に人間ドックに行きました。大腸検査は、普通の健診の中には入っていない。そこで「やって下さいよ」ってお願いしたら、立派な大腸癌が見つかりました。15センチほど切ったんです。13時間の手術でした。

以来今年で10年になりますけど、再発して手遅れで亡くなる方が結構多いんですね。最初の手術の後で安心してはいけません。

私は、大腸癌の手術をした後は毎月、通院しました。その都度、血液検査をして点検して貰ってたんです。ところが、やっぱりある時期、肝臓に転移していました。

癌は、1センチになるまでに10年ぐらいかかるらしいんですね。1センチから大きくなるのはあっちゃう間になるそうです。

「木原さん、あんたよくこの小さい病院にずっと来るねえ。大学病院とか県立病院とかに、みんな行くのに」と、先生がおっしゃる。

私は10年間、ずーっと同じお医者を追いかけてますから、先生が言われる。

「木原さんを殺したら化けて出るなあ」と。

「お願いします。私、後30年生きますから」と言っただけです。

すると先生、「私が持ちません」と。

「まあとにかくそうおっしゃらずにやって下さい」とお願いしました。

先に医者を選ぶのも大事でしょうけれども、これだと思ったらやっぱり徹底的について行く。ある程度の所は先生が見てくれまして、ちょっと危ないと思ったら、日赤に送られるんです。それを何回も繰り返しました。

・落ち込んでいる暇はない

楽天的なんですね。深刻に考えません。人が心配してくれますけど、私は心配しないんです。

私は落ち込んでいる暇がないんです。私は100迄生きるつもりです。皆さん応援して下さい。有難うございました。